



五の枝
 卷五
 大尾

13
 1455
 5



船
門へ遠 13
番 455
止

田舎



燈下戲墨玉之技卷五

東都

森羅子

著

○ 解の桂

憤せざれば啓せし。懼せざれば發せんと。圓珠經乃要
文たる。初と重行と。榛原みちの。激せし。今更夢此
こと。先々かぶとく。件の金子を。路用として。奔國へ。立帰
且ば。あ親と。海底より。沈め。糸珠の。ぬらび。かか。つた
ふ。懐び。み。あ。て。漫拵の。罪を。咎め。四五。つ。ま。が。経
隔たり。多。お。洲。う。こ。た。意。志。日。こ。終。ま。は。さ。り。け。し。ふ。

玉之技卷五

ちる即も子に憐む親の情に切なるは勿体な事
みよひ功名を記すに依振作し心を潜め力に竭し
て勤學し業が元來學業多けりふ上暫く親の
膝下で教と化々ふ有く銀雅に歴々れば大に人情
をけしたふゆに井蛙夏虫の見を脱け文義融通
一語無くして破竹のごとくなりけしは來春の撰奉
みの家第一の科に上らん事疑わしと傳ふじたる
妻のすれ文豪博士の助教當國み下向し和州
一この中れ文學も長たる諸生に宿所を集め
を出し文を依しむをさる元よりよひ後ける

事すれは依り出せふ文の地み擲は金玉の智をみんき
しなりけしは助者ちくと感ト撰秀文を撰中た
ふるを案がめは厚く敬とせ悦りけり其外教人を
儲生に募り二月上旬まで都みせり會試の日公
待べしといひしに日あはれ都へ帰りにたり扱えりみ
み合ふ家法生ともいふゆひくは後ひ連致之上りる
中に志高一人兼足せりし毫も居あつけしは重
以が師の傍東大寺の曉夢に侍たりや抑りりは人
あり日つなく傍ひ來り重行み書面し何ゆ急上系
延川み神よりくやと問けしは志昂派をさうくと流し

素師の法恩みんく。妙法撰拳の法くみかたきく
けし上の片海も早く怒くやと申た多れと。安み一つを
難混々素を茶病み傷り。其のち有馬より漫延し彼
是の難費み多子伝うかひろ中れ手陵より果く佐
み目かる心申のやふくこりさ。法推素下さるべしと
之の物くの日以交厚れ橋系に傳くれば。渠のまきわ
ふ男たれば一尋れ力と。船く船れみ何ゆ。後合よ押
がれが船傳さる事にして。きかつ上之より安後をんせを
心の底れ様とあり事。故に雪依ありふがぶと。去に
よろくをみるより。終更し。渠が家とも願されば。渠も又

邪門よりよらび。一旦通るを釣れば。彼をた何
をきかつが。助カ以文んと。而之怒を合め。老傷
庵を出入事希たれば。た信あり。伏をも知。家よ事
ぬるあり。今日去方より。祠堂の重二十支。収納し
てあり。ある。是をる費とて。都に上り。切さ。豚子の
玉斧を揮ひ。廣宅の官前の佳れ技と折。青雲の志
を遂る。及守中の事。ハ中は。勝利と云。後し。能に
解ひ申すべし。懐中より。件の重子。死に。出
らるれば。その其の。支規を。使ひ。出。觀子。三人。海山の
恩を。拜謝し。扱。法。用。潤。の上。の。重。さ。ぬ。是。より。出。立。せんと。

我とくにあなを個人。勇進んでおまじりか。日あり
必加ふ。多々いば助成り得見し。諸宿小投して体
息しけふ。程なく會試の日に成りれば。法蘭の舉人。大
とくく。大學寮より凡れ題を賜りて文を作しむ。
又孝博士其草稿を蒐集。大學寮の司より宗。天
覧小使なる。公に列姓めく。優劣を撰く。其文又
小依く。奉用ひらる。事差あり。其放榜の日す。てら。
各諸宿より扱て居く。撰り他事を許されば。或日重
仍着ちんとして。著やらぬ。ゆこのため。これ其の夕ぐれ
殆退屈したる。けし。門小出く。街の往來を。保居らる。

軒へ長櫃を。つらぎ。連なる。雜人ども。いらく。が。めく。あり
これ。い。ま。り。退人と。ま。る。ま。ん。と。み。彼。長。櫃。は。月。あ。り。た。れ
の内。猪。正。の。下。司。大。下。怒。り。吹。る。大。學。寮。小。投。く。此。後
法。撰。み。形。つ。た。る。人。々。鹿。鳴。の。宴。と。て。餐。の。儀。と。賜。は
ふ。た。り。其。法。撰。は。附。く。そ。う。觸。せ。能。か。く。繩。か。ん。と。い。ふ。
法。葉。子。を。只。今。濱。名。出。る。方。より。と。調。を。出。る。途。中。少。く
若。秋。撰。ト。た。る。ん。み。扱。く。い。ふ。系。か。落。度。其。つ。る。り。若
並。ぐ。し。と。重。形。を。引。居。させ。長。櫃。の。蓋。を。米。袋。に。て。
若。現。く。に。獅。も。換。ふ。は。道。と。と。態。と。伴。天。一。多。か
顔。魚。め。く。蓋。を。志。め。此。櫃。の。皮。た。か。く。し。大。半。解。

五之巻 五
四

けく 沙月ひみぬばに 其者に縄打て指北遠使の
懸け渡せと罵る。重行一身は汗を流し御示
有ましく 柔の此夜沙撰み短うりたる。大和國を
任人門部を而重行といふ者なる。存高うざる過
たれば何分許しあられと俺不智を核看れと付
て走ら出。此傳をえりよと下司の前は腰を屈め安
ら性置あまゝ人立ちも多ければ乞く我が入らせ
まんと性あり伴ひ扱此客人の不調法今更せん
うもなれば何卒其志の沙けらひみく穂使よ
於下さるべしといひれば短うば金子十両出さる

濱を去る之を付明日鹿鳴宴の茶までみ個をさる
しといへ重行のみとく下司が金子を係とら知つも
此於小廻りて是非及ぶと殺のおとく取出して
下司宿徳氣が於親りせみく情あふ我あればと我あ
あううにかり許せと伴の金子を取上る刀柄付る
大抄袋の中へ押入歩むり連て短うめをゆれげよ
お係め出坊をそのお傍を短うめを短う一問ふ短う
放榜れ目とあはれ我が守一の科によつてと分二才これ
科中し。此しゆあはれ幸かたし文昌星の恵り賜は
落毎れ身とならん。父母の沙教を宗吾が頼りいり



あらん其上曉交師の藝すれし二十支れ重も二分一
きひそいたる上今日不誨の足秘少く十支の重成失
ひたれが宿家此費用希國の語銀のして毎のべき運
命拙に系かれば明これ故擲み中らん事も是未はと
今すでちひ移みある文章もいつあんと心海は流
寝入り由とゆもが彼長櫃み実當り下司にたて
あゆ美をそんそ製是居る擲る門々々と殺人忠是
高すゆははち命着現をちちる被引るを是
智あく許させぬくといふ枕を助教をく是
まはの君候はた通今日此故擲み是守一の料

申すの事故法迎とて来りたる。そくくい冠を改
め更とてハ其候をね起ある宿秘やと。天を降し誨
つと上つて候へば様宿のか内も慌く遂ひ。先也をひ
くを候分上れハ助教を立きて冠をかりむしめ袍を
着せしめ。衣紋うけつろよ中に早極されみ果是か
轆ちちづく。紫福ハハ警言固の仕下茶後をそと。氣
肉あつこせゆしけれ。相大學寮あり、鹿鳴の宴をた
すひ。是行を大和守み補せられ。其外の舉人もま
く、下職を揚ひたれば。此急宸殿の階うけり。左右左
の袖をたれし。舞踏して天恩を謝し。各襟門は

乃大人の御稱譽。官加み餘る仕合なりといふ。深雪も
重なり心解りて見嬉し。泣み替は居多。於深雪を
懐びみ懐びを室ね後け。此席二人を誘ひ。そそくま
の式も終り。宗吾は泣して深雪が見と。永く通家の
好く似遣ひ。色重し。此成りれば。宗行馬帽子。得衣。改
め宗吾はをく招き。躬自衣とぬれば。平外のみ。心
重なり。碗一と。盃をぬく。宗吾みをも。以茶。おせ。此
後。一。椀原も。教。宗。傾け。相。泣。拍。笑。の。吐。く。者。今
も。字。五。深。雪。の。茶。を。招。き。せ。し。平。群。の。大。泣。き。ま。を
神。壽。へ。度。せ。し。深。の。深。身。持。板。塔。小。ぬ。り。盃。水。を。分。に

大酒小ぬり。碎狂のあやう。彼山あり。と。不。道。孫
の。弓。成。り。白。を。れ。や。を。古。高。に。負。葦。毛。の。馬。り。赤
誇。つ。た。う。瓜。搦。さ。せ。大。を。牽。せ。湯。の。山。に。入。り。得。り。せ
し。う。ぶ。物。一。も。あ。り。ま。い。は。つ。と。不。興。け。よ。引。よ。く。答
合。成。押。行。と。れ。あ。る。一。と。り。な。り。な。り。馬。人。ら。免。埋
漬。され。控。内。と。り。る。老。堂。を。ま。ぬ。め。よ。三。と。り。あ。り。つ。を
ま。で。深。味。子。を。ぬ。ぬ。さ。ふ。し。去。み。倍。く。小。百。合。か。方
の。ま。ま。も。押。の。け。と。長。か。抽。と。か。れ。は。家。と。あ。り。身。れ
代。を。納。め。ん。も。奉。意。あ。り。と。我。々。之。返。せ。し。八。の
不。同。再。へ。交。明。あ。り。為。方。な。れ。は。汝。が。徳。と。あ。す。と。

其傳戻しきりせし伝。涼く思みや若ひん月毎
みきる物を送り。安不をを後ね傳らふと抱かされば一
社の人々手をおく。笑坪の舎と焚きぬみり。阿豆日
小野の太和ちの申伝の家より勝利を稱して岳岳
と稱し。まよると曉夢の坊へ立こえ衆傷より布拉
と之れは伝ふ事限らば。形く重行の國府み有く。
仁政を宗とけし。けし。捨ふか。拾ひ。戸を忘れ
活る國とぬみけふ。續く二男一女を佐く。長男の家
の風伝吹傳く。次男の武伝學がめく。先その業を傳
く。免成長の海武官とぬく。た大将。出昇。途。女一

關白殿の政所中なる。大和守夫婦とあまんれ
終はふ政みく。百歳の齡なたりちけ。終る
傳え多利。

燈下戲墨玉之枝卷五大尾

